

特別展 江戸の櫛・簪

くし かんざし

—岡崎智予コレクション—

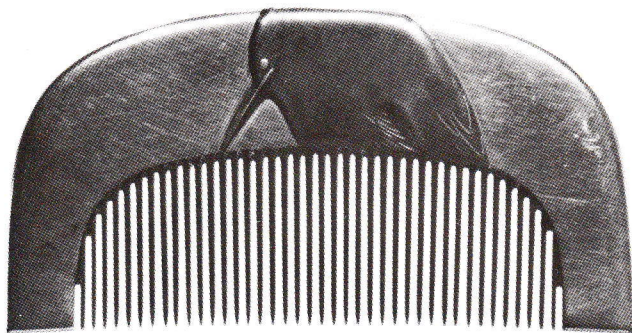
渋谷区立松濤美術館

主陳列室(地下1階)・特別陳列室(2階)

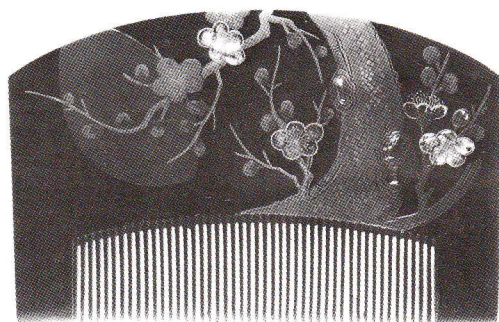
会期 昭和57年9月7日(火) ⇨ 10月24日(日)

休館日=9/12・16・20・24・27, 10/4・10・11・18

講演会 ○9月18日(土)「江戸の櫛・簪」 橋本澄子 (東京国立博物館)
午後2時より ○10月9日(土)「櫛・簪と江戸文化」 樋口清之 (国学院大学名誉教授)



『簪文様蒔絵櫛』尾形光琳作



『梅松月文様蒔絵櫛』原羊遊斎作

この展観は、渋谷区在住の岡崎智予氏の御好意と御協力により実現いたしました。同氏が多年にわたり情熱を傾けて蒐集(しゅうしゅう)された所蔵品の中から、江戸時代の櫛・簪(かんざし)の逸品を選んで陳列したものであります。

美しく結いあげられた黒髪にさされた金蒔絵(まさえ)の櫛には華やかさがあり、珊瑚の玉簪には粹な美しさがあります。日本髪に櫛・簪がなかったなら、その美しさも半減したことでありましょう。髪飾りとしての櫛・簪は、髪型の重要な要素であるといえます。

わが国の櫛・簪の歴史は、遠く石器時代にさかのぼります。古代では呪力(じゅりょく)のあるものと考えられました。髪に一本の細い棒をさすことにより、悪魔を払うことができると考えられたのであります。この細い棒が髪串であり、この髪串を何本か束(たば)ねて櫛の様に用いたのもやはり髪串でありました。前者が簪となり、後者が櫛として発達したものと考えられます。

この櫛・簪が、実用品となり、さらに装飾品として、髪型とともに江戸時代、特に中期以降顕著な発達を示しました。今日に見る日本髪は、江戸時代に定着したものでありますが、その間には、幾多の流行、変遷が見られました。それらは、基本的には、前髪・びん・たば・髷(まげ)などから構成される複雑なものであり、これらの部分が一つに統一されて美しさを示すものでありました。

この統一美に一役買うのが櫛であるといえます。立体的

な美しさが特に要求される日本髪は、厳しい形の制約があります。その為に個々人の個性を生かすには、自由で変化に富んだ櫛が重要な働きを示しました。実用的なものであると同時に、そこには、江戸女性の趣味性がもっとも端的に現わされているといえるでしょう。

また、簪は、髪飾りの中でも、もっとも華やかな存在であります。武家の子女の用いたものから、町娘の用いたものまで、その種類も多彩であり、それぞれの階級に応じた一種の晴れがましさが感じられます。その時々々の女ごころをこめて髪にさしたものの、それが簪であったのではないのでしょうか。

これらの櫛・簪は、実用品・装飾品であると同時に、工芸品としても特筆すべきものであります。木や金属・象牙・鼈甲(べっこう)などの材質に、蒔絵・螺鈿(らでん)・象嵌(ぞうがん)・透し彫りなどの装飾技法を施し、花鳥草木・風景・人物、さらには南蛮風物などの様々の意匠が可憐な形の中に描かれております。

これらの櫛・簪の作者として、尾形光琳に始まる琳派(りんぱ)の原羊遊斎・中山胡民、幕府の御用蒔絵師の系譜につながる古満巨柳・寛哉や梶川文龍斎などの名工の名があげられます。また、芝山や柳川といった独特の技法があります。

我々は、この展観を通して、有名無名を問わず、江戸の工芸作家達のすぐれた造形感覚に触れることができるであります。

おもな出品作品

『京洛八景図蒔絵櫛』梶川文龍斎作

『瓢箪駒図蒔絵櫛』古満巨柳作

『数小路文様蒔絵櫛』

酒井抱一下絵、原羊遊斎作

『業平道行き図蒔絵櫛』中山胡民作

『南蛮人物図象牙櫛・簪・笄』

『北斎富嶽三十六景図写蒔絵櫛・印籠』

巨満遠舟作

渋谷区在住作家の作品 サロン ミューゼ(2階)

出品目録／作家略歴 (50音順)

入山白翁 《渦潮》1978年 漆画 変形30号
明治37年(1904) 新潟県白根市に生まれる
昭和8年(1933) 東京美術学校漆工科卒業

大久保 泰 《トレドの眺め》1967年 F30号
明治38年(1905) 愛知県豊橋市に生まれる
昭和3年(1928) 早稲田大学商学部卒業 野口弥太郎・児島善三郎に学ぶ

大森啓助 《群泳》1976年 F30号
明治31年(1898) 兵庫県神戸市に生まれる
大正9年(1920) 関西学院高等部卒業 川端画学校で学ぶ

清原啓一 《古代壺の盛薔薇》1982年 F20号
昭和2年(1927) 富山県砺波市に生まれる
昭和27年(1952) 明治大学卒業 辻永に学ぶ

児玉幸雄 《オンフルールの漁港》1981年 F30号
大正5年(1916) 大阪市に生まれる
昭和14年(1939) 関西学院大学卒業

近岡善次郎 《スペインの思い出》1968年 M40号
大正3年(1914) 山形県新庄市に生まれる
昭和8年(1933) 文化学院美術部卒業 石井柏亭・有島生馬山下新太郎に学ぶ

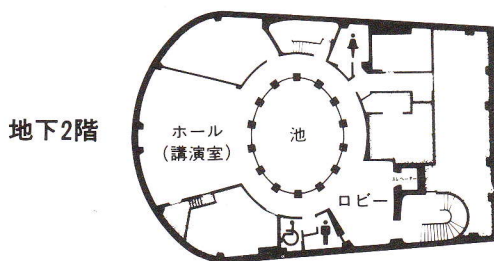
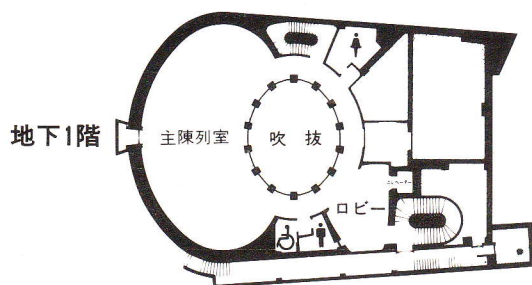
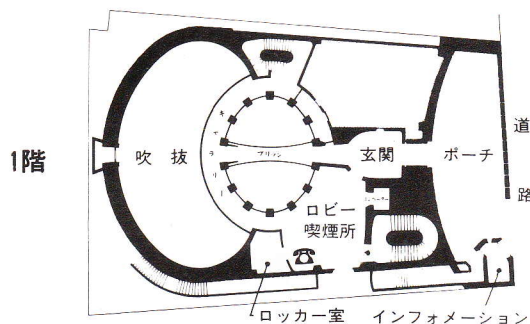
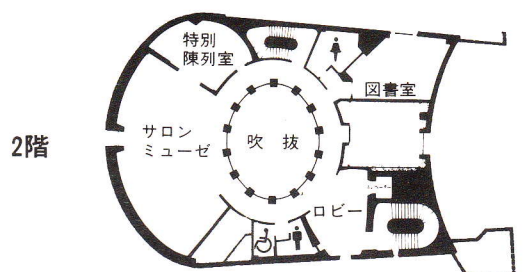
堀内正和 《かたむくカタチ1》1982年 高さ226.5cm
明治44年(1911) 京都市に生まれる
昭和4年(1929) 東京高等工芸学校彫刻部を中退、二科会の研究所(番衆技塾)に入り、藤川勇造に師事する

村田勝四郎 《少年とトキ》1967年 高さ137cm
明治34年(1901) 大阪市に生まれる
大正14年(1925) 東京美術学校彫刻科卒業 北村西望に師事、ひきつづき研究科に入り朝倉文夫に師事する

森 芳雄 《助ける》1977年 F30号
明治41年(1908) 東京に生まれる
大正15年(1926) 慶応義塾普通部修了。1930年協会洋画研究所に入り、中山巍の指導を受ける

脇田愛二郎 《コスミックボリューム》1981年 高さ100cm
昭和17年(1942) 東京に生まれる
昭和39年(1964) 武蔵野美術大学卒業
昭和40年(1965) ニューヨーク、ブルックリン・アート・ミュージアムに学ぶ

松濤美術館・平面図

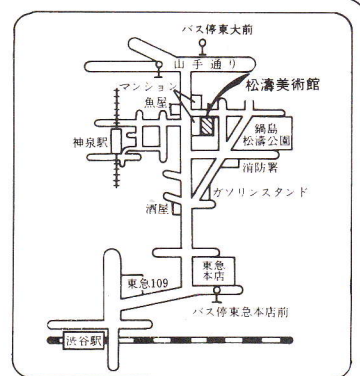


《ご案内》

- 開館時間 午前9時～午後5時(入館は4時30分まで)
- 休館日 毎週月曜日(第2週のみ日曜日)
祝日の翌日、年末年始(12月29日～1月3日)

○入館料

	個人	団体(20人以上)
一般	200円	160円
小・中学生	100円	80円



渋谷区立松濤美術館 〒150 東京都渋谷区松濤二丁目14番14号 電話 (03)465-9421